

J.S.S.W NEWS

日本ソーシャルワーク学会通信

2022年6月5日

【発行責任者】小山 隆

【編集責任者】空閑 浩人

No.133

Contents

I. 巻頭言「三人称の戦争とソーシャルワーク的想像力」	荒井 浩道… 1
II. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2021」報告	2
III. 「2021 年度第 5 回理事会」（2022 年 3 月 28 日開催）報告	5
IV. 「第 39 回大会」（7 月 2 日・3 日）のお知らせ	8
V. 新入会員の声	10
編集後記	空閑 浩人…12

I. 巻頭言

三人称の戦争とソーシャルワーク的想像力

駒澤大学 荒井 浩道

（学会理事／研究推進第 2 委員会・総務委員会）

2022 年 2 月 24 日、ウクライナはロシアによる軍事侵攻を受けた。ウクライナの各地で戦闘が起こり、多数の死傷者がでるなど被害は拡大している。看過できない人権侵害も起きている。戦禍を逃れるため数百万もの市民が、国外に避難する事態となっている。この巻頭言を書いている 2022 年 5 月時点においても軍事侵攻は継続されており、終結する見通しは立っていない。

このウクライナ危機は、「戦争」とよぶことができるだろう。戦争は、いうまでもなく、非ソーシャルワーク的、非社会福祉的な行為であり状態である。本学会を含め、ソーシャルワーク、社会福祉に関係する各団体は、ロシアによる軍事侵攻の停止とウクライナの安定を求める声明を発出している。日本ソーシャルワーカー連盟（JFSW）では、ウクライナ国境等におけるソーシャルワーカーによる難民支援のための活動費としての義援金を、国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）の地域組織である IFSW ヨーロッパに届ける募金を行っている。

ところで、わたしは戦争を知らない。より正確に言えば一人称としても二人称としても戦争を経験したことがない。自身や近親者が戦場に赴いた経験はないし、直接的な被害にあった経験もない。戦争は、過去のものであり、歴史の教科書や映像資料を通して学習する内容であった。今回のウクライナ危機もメディアをとおして知るのみである。経験しているのは、あくまでも三人称としての戦争である。

ソーシャルメディアの発達により、刻々と移り変わる戦況に接することができるようになった。またウクライナ市民の個別的な被害状況にもアクセスすることが可能である。このことにより、遠方にながらもかつてよりは戦争のリアリティに接近することができるようになっている。しかし、やはりわたしは一人称や二人称として戦争を経験しているわけではない。わたしが三人称の戦争しか知らないことに変わりはない。

もちろん戦争という言葉の意味は知っている。辞書を引けば、「軍隊と軍隊とが兵器を用いて争うこと。特に、国家が他国に対し、自己の目的を達するために武力を行使する闘争状態（後略）」（小学館『デジタル大辞泉』）とある。辞書には、「激しい争いや競争。“受験—”という派生的な意味も書かれている。団塊

ジュニアとしては、一人称として経験したこちらの戦争には馴染みがある。

戦争との関連で、いまでも覚えている小学生の頃の記憶がある。国語の授業で戦争の対義語を教えてもらった。周知のとおり、それは「平和」である。当時は、このことがよく理解できず戸惑った。「なぜ戦争という行為の対義語が、何もしない状態としての平和なのか」という幼き疑問を解消できなかった。テストで得点するために機械的に覚えるという残念な学習をしたことを悔いる。戦争を知らないと、平和の意味も曖昧になる。

しかし、今回のウクライナ危機は、他人事として考えることはできない。三人称的な経験かもしれないが、自分とは無関係な出来事として切り離して考えることはできない。同じ時間を過ごす大勢の人々過酷な状況におかれていることを想像すると胸が苦しくなる。先人から伝え聞いていた「戦争」の意味がリアルティを帯びる。同時に、これまで曖昧だった「平和」という概念の輪郭が鮮明になる。

かつてミルズ (C.W.Mills) は、個人的な問題と公的な問題を結びつけてとらえる力を社会学的想像力と呼んだ (Mills 1959=1965)。これに倣い、「ソーシャルワーク的想像力」の可能性を展望することもできるだろう。それはたとえば、三人称的な経験であったとしても我が事としてとらえる力、といえるのではないだろうか。わたしたちがソーシャルワーク的想像力を発揮することでなにかしらの貢献ができないかと考える。

早期に戦争が終結し、平和が訪れることを心より祈念する。

Ⅱ. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2021」報告

(日本ソーシャルワーク学会&救急認定ソーシャルワーカー認定機構共同主催)

テーマ：実践者と研究者の対話（クロストーク）で拓く ESW の「実践理論」
～「社会的救命」に資する力量あるソーシャルワーカーを目指して～

同志社大学 野村 裕美

(学会理事／研究推進第三委員会・総務委員会／救急認定ソーシャルワーカー認定機構理事)

去る3月21日に日本ソーシャルワーク学会と救急認定ソーシャルワーカー認定機構との共同開催によるコラボセミナーを開催した。第三委員会企画として提案する前に、認定機構理事会にて恐る恐る相談をもちかけた。どちらかというと、これまで救急医学領域での議論、また医療ソーシャルワーカー内での議論を重ねてきているが、「もっと広くソーシャルワークに関して議論したい」「自分たちがやっていることが確かにソーシャルワークなのか率直な議論がしたい」との声が複数でできた。現任の救急認定ソーシャルワーカー (ESW) たち、及び救命医たちから賛同を得られたことが企画を推進する上で大きな力となった。

準備で2つの点に力点をおいてきた。まず第一に、実行委員内でのコミュニケーションを活発にとるという点である。企画が採用された昨年7月より、学会理事と機構理事によるオンラインでの会議および slack での情報共有プラットフォームを作り、不慣れながら活用してきた。ESW がどのような現実をとらえているのかをまずは伝え、それに対して研究者が抱く疑問を率直にフィードバックしてもらう環境を整えた。そのような中でどんどん事例がでてきたが、最新の傾向として、事情があり家族支援を受けられない単身の若者、あるいは、都市部に「死ににきた」自殺が未遂に終わった若者へのその後の人生の回復に関わる支援など、ESW が若者の孤独や生きづらさへの関わりが増加傾向にあることも明らかとなった。ブレーンストーミングを重ね、「社会的救命」および「キーパーソン機能不全」という言葉で置き換えることができる事例に絞っていった。12月には、事前に大西医師にインタビューを行い、「社会的救命は、専門職でも地

域の誰でもが押せる、押すべきスイッチである」との意の発言を伺った。地域の、行動原理の異なるさまざまな立場の人々が「社会的救命」を手がかりに、支援が必要な人々を捨て置かないようにするためにはどうしたらよいか、またどのようなパートナーシップを築いていけばよいのかを考える機会になればよい。個人的にはそのような思いで参画してきた。

力点をおいてきた第二は、3名のESWの提示する事例作りの過程である。認定機構では、ESW認定研修の初回から臨床推論を取り入れ、用いる事例教材づくりに力を注いでいる。臨床推論は、ほとんど無意識のうちに頭の中で行っている思考を論理的に言語化することであるが、3名のESWとは追加の会議を重ね、実践者の言葉でのその場面における行為の理由づけに徹底的に取り組んだ。救急救命というただでさえ時間の流れが速く瞬時の判断が求められる支援過程について、どう考え、どう行動するのかをスローモーションで聞きだしていく作業である。自明化していること、自動化した思考をつまびらかに語る作業は大変なことである。その作業には、他のESWも同席し、フィードバックを行った。3名のESWたちは、もしかしから逃げ出したくなることもあったかもしれない。この場を借りて最後までともに取り組んでくれたことに心から感謝するとともに、事例解説で一部取り入れてみた複線経路・等至性モデルによるTEM図など帰納法を使ってESW実践の見える化に取り組む意義を実感する大きな契機となった。

セミナー当日は、159名の参加となった。直前に関東地方であった地震の影響を考慮し、急遽後日動画配信も行った。動画（4月末まで公開）は130回の視聴があった。115名の方にアンケートを寄せて頂いた中から、3名の方にセミナーの報告を依頼した。ESWとともに働いている医師の立場、ESWの制度を作ってきたソーシャルワーカーの立場、ソーシャルワーク研究に取り組んでいる院生の立場の方々からの寄稿となっている。最後に、本企画実施を認めてくださった学会の皆様、機構の皆様、セミナーに参加視聴して下さった全ての皆様に心より御礼を申し上げたい。

同志社大学大学院博士後期課程 黒田 由衣

令和4年3月21日に日本ソーシャルワーク学会と救急認定ソーシャルワーカー認定機構のコラボ企画として開催されたセミナー、「実践者と研究者の対話（クロストーク）で拓くESWの『実践理論』～『社会的救命』に資する力量あるソーシャルワーカーを目指して～」に参加させていただいた。

前半の話題提供では、救急医療現場の医師の立場から、定光大海氏（堺平成病院）、大西光雄氏（大阪医療センター救命救急センター）より、ESW創設の背景や「社会的救命（患者の社会的側面への支援）」の役割を担うESWに期待することなどが語られ、ESWの実践理論構築への示唆を示していただいた。その後、野村裕美氏（同志社大学）より、後半に報告される実践事例を読み解くためのESWの実践枠組みについての説明がなされた。後半のクロストークでは、まず3名の実践者の方々より、救急医療の現場のなかで、どのような状況においてESWとしての介入の「スイッチ」が入ったかを実践事例をもとに報告していただいた。その後、研究者からのメッセージとして、浅野貴博氏（ルーテル学院大学）から、実践を言語化（振り返り）の作業を通して、「社会的救命」のスイッチが可視化され、ESWの実践理論の構築につながるのではないかと提示があり、さらに大島巖氏（東北福祉大学）からは、ESW実践の評価の必要性とその仕組み作りについて提案がなされた。

救急医療の現場でESWが出会う患者は、事故や急な症状で何の準備もなく予期しない出来事に見舞われた人、そのため、病気以外のさまざまな調整を迫られる必要がある人、また急性期治療だけでなく、その後の行き先の選択、決断を迫られる可能性の高い人、さらには相談する家族や仲間、近所の人がおらず、ギリギリの状態まで放っておいた状態の人、言い換えれば、頼る人、「助けて」と言える存在の人が近くにおらず、その結果としての救急医療に頼らざるをえなかった人達も多い。その場は救命の最前線であるとともに

に、そのような地域課題や社会的な背景を伴う問題が持ち込まれる場であり、まさに「病院のなかで一番地域とつながっているところ」といえる。ゆえに、救急医療の現場におけるこれらの課題は、「カルテのない人」も含め、地域社会から孤立している人たちに対して、いかに地域のなかで新たなつながりや関係を構築していくかという地域社会全体にかかわる問題であるということが理解できた。

今回、ESWの実践報告を通して、改めて、すべてのソーシャルワーカーが持つべき価値基盤を考えるとともに、ESWの実践理論構築のための言語化（振り返り）の作業において、患者を社会システムの中で捉えていくことの重要性について示唆をすることができた。ESWは、一医療機関のみのソーシャルワーカーではない。その機関や組織が属する地域住民全体のソーシャルワーカーとしてのミクロ、メゾ、マクロ実践について多くの学びを得た。この度は、貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。

済生会横浜市東部病院 副院長 山崎 元靖

日本ソーシャルワーク学会&救急認定ソーシャルワーカー認定機構共催のソーシャルワーク・コラボセミナー 2021 を聴講させて頂きました。個人的には医療ソーシャルワーカー（MSW）や、救急認定ソーシャルワーカー（ESW）のアイデンティティについての分析が興味深かったです。

当院にも MSW が 11 人在籍し、今までに 2 人が ESW 資格を取得しましたが、こんなに頼りになり重要な役割を担っているのに、今ひとつアイデンティティがはっきりしない MSW・ESW とはなんぞや？ということに、以前より関心を持っていました。院内では転院調整をする人と誤解している職員もまだ多く、転院が不要な場合は残念ながら MSW・ESW に相談しないケースも散見されています。

救急医療は、病院という閉ざされた空間と社会を繋ぐ窓でもあり、社会問題の縮図でもあります。主に身体的な側面を担う医師等と一緒に、社会的側面から支援する ESW が体系化され、在院日数の短縮以外でも対外的に評価され、将来的には救命救急センターの充実度段階評価や診療報酬にまで発展することを期待します。そのためには、救急患者には可能な限り早く介入すべき社会的問題が多く存在することを示す必要があると思います。

また私は、救急医・DMAT（Disaster Medical Assistance Team：災害派遣医療チーム）として災害医療に係わっていますが、講師の方にも DMAT 隊員がいらっしゃったように、この分野にも ESW が活躍できる場が増えていると感じています。被災した病院からの患者の避難や転院、避難所内の要介護者への対応等、災害関連死を防ぐために被災地内外の保健医療体制を俯瞰しながら個々の患者に対応する事が多いので、ESW の強みが活かせるはずです。昨今の新型コロナも災害対応と類似する部分があり、高い機動力や、混在する様々な困難への迅速な対応など、能力が活かせる場面も多いと思いますので、ESW の 1 つの領域としてご検討頂けますと幸いです。

東海大学医学部附属病院 内田 敦子

命を助けなければならない救急医療の場に、今、その人の「社会的救命」という視点が、明確に理論づけられようとしている。この「社会的救命」という言葉に、ジャストフィットしたソーシャルワーカーは多いのではないだろうか。私もその一人であり、日々の実践をどう研究者の方に見ていただけるのか、期待を胸にこの研修に参加した。

研修は、初めに定光先生、大西先生からの力強い激励として、「社会的救命」のスイッチを押すことのできる高い専門性を持つ人材の育成、そのシステム作りが必要であるという、大きな宿題をいただいた。これは大変なことだと思った。また、それを踏まえて、ESW の五感と感性を野村先生が解説してくださり、実

践者三名の事例が紐解かれた。それぞれの特性ある病院の ESW として、問題を発見し解決へと導きつつ、病院のある地域での立ち位置を考えながら支援を行うソーシャルワークが短期間の中で展開されていた。多くの ESW が抱えるであろうジレンマについても語られた。加えて、その立ち位置を点ではなく線として地域に結んでいくというメゾへの働きかけを紹介してくださった篠原氏の発表も実践者として大きく共感し、刺激を受けた。さらに、経験と ESW としての実践を、浅野先生から、また業務の標準化、価値という視点から大島先生が臨床場面を言語に変換してくだり、実践理論の構築が必要であるという熱いまとめで研修の幕が閉じられた。

恥ずかしながら、今回私は研究者の先生方からの臨床とその分析、というコラボレーションを体験することにより、改めて、理論と実践の仕組みを体感することができた。両輪がしっかりと私の中で地に着き、自らの実践も振り返ることができた。

「社会的救命」は救命センターに来る患者だけの課題ではない。大島先生が最後におっしゃったように、この意味を広くソーシャルワーク全般に検討していけるよう、日々実践を重ねていきたい。このような機会をくださった実行委員会の皆様に感謝している。ありがとうございました。

Ⅲ. 「2021 年度第 5 回理事会」 報告

○日 時：2022 年 3 月 28 日（日）18 時～20 時 WEB（ZOOM）会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏 名	所 属	出欠
会 長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	久保 美紀	明治学院大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	委任状
	大島 巖	東北福祉大学	出
	空閑 浩人	同志社大学	出
理 事	池田 雅子	北星学園大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	横山登志子	札幌学院大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	浅野 貴博	ルーテル学院大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	岡田 まり	立命館大学	出
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	委任状
	杉野 聖子	江戸川学園おおたかの森専門学校	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
	ヴィラーグヴィクトル	長崎国際大学	出
監 事	黒木 保博	長野大学	出
	岡本 民夫	同志社大学名誉教授	欠
庶 務	野村 裕美	同志社大学	出

* 次期理事就任予定者 川島ゆり子（日本福祉大学）（出席）

1. 2022 年度役員体制 & 委員会体制について

2021 年度に実施された役員選挙の結果（学会HP & ニュースレターで公示済）を踏まえて、2022 年度役員体制 & 委員会体制について協議を行った。正式には、7 月の総会で提案・承認となるが、4 月以降は、新旧の理事・委員が引継ぎを含めて活動予定を策定する旨確認した。

2. (株) ワールドプランニングとの業務委託契約の件

2021 年度は主に以下の業務（会員管理、学会経費等の経理業務、学会事務管理業務、学会運営、メールマガジンその他）に関する委託契約を結んでいる。次年度（2022 年度）も契約更新の方向で検討したい旨小山会長から提案があり、承認された。

3. 「ウクライナ危機」に関する会長声明について

* 標記の件について、小山会長作成文案を 3 月 19 日開催の正副会長会議で協議の後で、ホームページに掲載した旨の報告があり、了承された。

「ウクライナ危機」に関する会長声明

2022 年 3 月 19 日

日本ソーシャルワーク学会 会長 小山 隆

前年春から緊張を高めていた、ロシア・ウクライナ間の軍事的緊張は、2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナへの全面侵攻をもって、世界の大方の了解する限度を超えるに至り、各国のソーシャルワーク関係団体も様々な内容の声明、呼びかけを行っています。

以下に日本ソーシャルワーク学会会長としての声明を出します。

第一に、「侵略」「戦争」という言葉を使うか否かに関わらず、他国に対して振るわれる「国家による暴力」は（自国民に対する国家の暴力も含めて）、理由の如何を問わず非難され否定されるべきことです。先ずは、市民を巻き込む国家レベルの「戦争」状態は一刻も早く終結されるべきと強く訴えます。

第二に、2 月 24 日以降の軍事的侵攻によって現実に発生しているウクライナに住む人々が受けた甚大な被害は看過できません。300 万を超えるウクライナ難民を受け入れる近隣国の負担も大きく、問題解決後も破壊されたインフラなどの復興には気の遠くなる時間と努力が必要になります。

また、経済制裁を受けたロシア国民の被害も実は少なくありません。加害国、被害国、近隣国といった立場を越えて被害を受けるのは、そこで生活する人々です。

そのことに心を致すことの大切さを強調したいと思います。

一例として、日本赤十字社の「ウクライナ人道危機救援金」、日本 UNICEF 協会の「ウクライナ緊急募金」、国連 UNHCR 協会の「ウクライナ緊急事態」への募金等もご検討ください。

4. 各委員会より活動報告・活動予定等

○研究推進第一委員会

- (1) 学会誌編集委員会より、学会誌 44 号について査読・編集作業中であること、および投稿規程、投稿原稿チェックリストの改訂について検討中である旨報告があった。
- (2) 学会賞選考委員会より、現在選考作業中であること、および 2022 年度第 1 回の理事会で選考結果の報告と候補者の提案予定である旨の報告があった。
- (3) 研究奨励委員会より、例年通り 2022 年 5 月末日を締切とし、会員研究奨励費の募集を行い、2022 年度第 2 回の理事会で候補者および研究テーマの提案予定である旨の報告があった。

○研究推進第二委員会

- (1) 2022 年度第 39 回大会（青森大会：7 月 2 日（土）・3 日（日））について、準備状況やプログラム等の検討状況についての報告があった。
- (2) 国際研究セミナー（1 月 22 日（土）15 時～Zoom ウェビナーによる開催：テーマ「国際的な舞台におけるソーシャルアクションーソーシャルワーカーによる国連アドボカシーと SDGsー」）の報告があった。
- (3) 全母協との共同研究（テーマ「母子生活支援施設におけるソーシャルワーク実践の枠組みとその構築のための検討課題」）について、進捗状況及び今後の予定について報告があった。

○研究推進第三委員会

- (1) 出版・教材開発班より、「実践研究支援ワークショップ」（1 日目：2022 年 2 月 13 日（日）13:00-17:00 および 2 日目：2022 年 3 月 6 日（日）13:00-17:00 で開催）について、参加者のアンケート結果および今後の方向性等を含めて報告があった。
- (2) 社会貢献推進班より、2021 年度ソーシャルワークコラボセミナー（2022 年 3 月 21 日（月・祝）、救急認定ソーシャルワーカー認定機構と共催、テーマ：実践者と研究者の対話（クロストーク）で拓く ESW の「実践理論」～「社会的救命」に資する力量あるソーシャルワーカーを目指して～）の報告があった。また、2022 年度については、第 39 回大会（青森大会）との関連で、青森県社会福祉士会とのコラボを予定している旨の報告があった。

○国際委員会

前出の「国際研究セミナー」に関する報告があった。

○総務委員会

- (1) メールマガジン（2022 年 2 月（100）号～2022 年 3 月（101）号発行済）、ニュースレター（第 132 号発行（2022 年 3 月 10 日））についての報告があった。
- (2) 学術論文データベース（EBSCOhost:“エブスコホスト”）の本学会誌掲載論文の収録について、契約手続き等に関する報告があった。

5. 会員の動向（2022 年 1 月 9 日以降～2022 年 3 月 25 日）

以下の方々の入会、退会について承認された。

(1) 入会（5 名）

	会員種別	氏 名	所 属
1	正会員	森川 和珠	日本福祉大学大学院博士課程福祉社会開発研究科
2	正会員	高泉 一生	社会福祉法人北楡会札幌北楡病院
3	正会員	山田 修	安曇野市北部地域包括支援センター
4	正会員	刑部多衣美	川崎医療福祉大学大学院博士後期課程
5	正会員	泉 啓	岩手県立大学社会福祉学部

(2) 退会（15 名）

岡部卓、宮江真矢、日比野絹子、久保茂樹、竹村睦子、森朋子、岡田朋子、寺上典枝、三島亜紀子、田中清、藤田譲、近藤鉄浩、小田美季、中里哲也、上原正希

6. 次回（2022 年度第 1 回）理事会の日程について

2022 年 5 月下旬に開催することとなった。

7. その他

和気理事より「ソーシャルケアサービス従事者協議会」からの、ウクライナにおける人道回廊の緊急設置に関する緊急要請に関する件について提案があった。緊急要請文について協議した結果、本学会として会長名を掲載することが承認された。

IV. 日本ソーシャルワーク学会 2022 年度 「第 39 回大会」のお知らせ

大会テーマ：「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

<開催趣意>

わが国では、2008 年をピークに総人口が減少に転じ、地方から都市部への人口流出も継続している。人口減少は、地域での生活継続の困難性やインフラとしての福祉サービス提供機関、ソーシャルワーカーをはじめとする専門職の担い手不足も生じさせる。そのため、既存の制度があり、ソーシャルワークを必要とする人がいるにもかかわらず、サービスや専門の人材配置が少なく、福祉課題に十分対処できない地域も少なくない。

人口減少地域でのソーシャルワーク実践では、地域住民の協力体制の構築をはじめ、限られた人材や社会資源のなかで、専門的サービスの提供体制も検討しなければならない。よって、本大会では、人口減少地域でのソーシャルワークの創造性について議論を深めたい。

期日：2022 年 7 月 2 日（土）～3 日（日）

会場：青森県立保健大学（青森県青森市浜館字間瀬 58-1）

実行委員会：児玉寛子（委員長・青森県立保健大学教授）、工藤英明（事務局長・同大准教授）、
宮本雅央（委員・同大講師）、田中志子（委員・青森大学教授）

開催形式：Zoom によるオンライン開催

参加費：会員 3,000 円、非会員 5,000 円、県内実践者 3,000 円、学生・大学院生 1,000 円

プログラム

1 日目 ○特別講演「過疎地域における自殺予防」大山博史

○開催校企画シンポジウム・テーマ「人口減少地域におけるソーシャルワークの創造性」

シンポジスト 1 井上雅哉（鯉ヶ沢町社会福祉協議会 事務局長）

シンポジスト 2 大島一之（社会福祉法人あーると 理事長）

シンポジスト 3 池田右文（池田介護研究所 代表）

座 長 空閑浩人（同志社大学 教授・学会副会長）

○学会年次総会

2 日目 ○学会企画シンポジウム

テーマ：「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」からの理論的・実践的問い直し

<企画意図>

1984年に本学会は「社会福祉実践理論研究会」として設立し、1986年の「日本社会福祉実践理論学会」への継承を経て2009年に「日本ソーシャルワーク学会」に改称され、第39回大会は改称後13年目となる。また、2021年度入学生から適用されている新社会福祉士養成カリキュラムでは、「相談援助」から「ソーシャルワーク」へと科目名称が変更し、「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士」の認識が明確化された。これらの経過や直面するさまざまな福祉課題をふまえたうえで、本学会の学会企画シンポジウムは2019年より3つのテーマのもと3年計画で連続的に実施してきた。1つ目は本質的なテーマ設定、2つ目は、実践的なテーマ設定、3つ目はソーシャルワークの調査研究に関するテーマ設定である。

今回の第39回大会・学会企画シンポジウムでは、これまで実施してきた3テーマに共通する基本概念をとりあげてテーマとし、あらためてソーシャルワークの理論的・実践的課題を検討することにした。具体的には、現代ソーシャルワークの重要概念である「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」をとりあげて議論を深め、共通理解を得たい。近年の実践あるいは養成教育において「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」が前提となっていると思われるが、かならずしも明示的に共有できているわけではない。そこで、「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」とは何か、そして、グローバル定義に示されているようなソーシャルワークが内在的に有してきた本質的機能とは何か、また制度が社会福祉士に求めている機能・役割は何かについて、「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」との関連で報告を受け、議論を行う。

発題者には「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」の概念的・理論的な立場からの報告と、国際的文脈からの報告、さらには実践の立場からの意見提示をして頂き、参加者との対話的議論を行う。

「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」の実践や養成が求められる現在にあって、あらためて、真の「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」のためには何が必要なのか、課題となることは何かについて検討したい。

発題者① 理論的立場から「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」とは何か

法政大学 高良 麻子

発題者② 国際的文脈における「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」

東京都立大学 和気 純子

発題者③ 実践的立場から「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」について考えること

NPO 法人リカバリー代表 大嶋 栄子

コメンテーター 同志社大学 木原 活信

コーディネーター 札幌学院大学 横山 登志子

○自由研究発表

*参加申し込みについては、青森県立保健大学ホームページよりお願いします。

<http://www.auhw.ac.jp/gakkai2/index.html>

今後、学会ホームページでも詳細をお知らせしていきます。

Ⅶ. 新入会員の声

実践と研究の循環をめざして

浅草寺福祉会館 金田 寿世

江戸、東京、下町、浅草などのシンボルとして世界的にも有名な雷門（かみなりもん）を総門とする浅草寺（せんそうじ）。浅草寺が運営する「浅草寺福祉会館」は、大正13年に開設した「浅草寺婦人相談宿泊所」を前身として本堂の裏手にあります。「個々の悩みや具体的な問題を解決することは“抜苦与楽（ばっくよく）”の宗教本来の仕事であり、慈悲の実践に外ならない」という理想の下、時代のニーズに合わせた事業を展開しています。

現在では「ささえる（相談）・つながる（ネットワーク／啓発）・ほっとする（憩いの場）」の事業を実践すると同時に、活動を見直してよりよい取り組みとなるよう調査・研究も行っています。特に相談活動については、相談記録のテキスト型データを用いた分析を行う研究を進めており、本学会の諸先生方からご指導を賜りたく入会いたしました。実践と研究を循環させて、さらなるソーシャルワーク活動に繋げていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

入会のご挨拶

岩手県立大学社会福祉学部 泉 啓

この度、入会させていただきました泉啓と申します。私は、大学で精神保健福祉士の養成教育に携わっておりますが、元々は精神障害者や依存症当事者のライフヒストリーを調査したり、当事者にとっての自助グループの意義を研究してきました。学問的な出自は社会学であり、社会学者と社会福祉学者の蝙蝠的な人間かもしれません。他方で、現場でソーシャルワーカーが抱える問題を目の当たりにするなかで、現場に還元できる研究を行いたいと思うようになり、今回入会するに至りました。

複数の研究に手を付けている状態ですが、現在関心をもって取り組んでいるのが、社会学におけるエスノメソドロジー・会話分析（EMCA）の手法を用いて、ソーシャルワーカーや福祉系実習生のコミュニケーション技術を明らかにする仕事です。福祉教育に貢献していきたいと願っています。よろしくお願いいたします。

入会にあたってのご挨拶

仙台市宮城野福祉事務所 佐藤 千草

この度、入会させていただきました、佐藤千草と申します。私は、仙台市児童相談所に6年勤務し、現在、仙台市宮城野福祉事務所の保護課に勤務しております。児童相談所、保護課の業務を通して、様々なケースと関わり、多問題を抱える世帯への対応、ソーシャルワーク実践のあり方が問われていると日々感じています。

現在、取り組んでいる研究としては、母子生活支援施設におけるソーシャルワークの構造と課題についてです。母子生活支援施設における、ソーシャルワークの構造、実践の枠組みを明らかにすること、その枠組みを構築するためにはどのような課題があるか等、事例分析を中心に研究グループのメンバーの一員として取り組んでいます。本学会で皆様にご指導いただきながら、学会活動から多くのことを吸収し、自分自身の実践力の向上、社会に貢献できるよう精進していければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

入会にあたってのご挨拶

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻 博士後期課程 刑部 多衣美

この度は、入会を承認していただきありがとうございます。私は、主に高齢者福祉と精神保健福祉領域にて実践してきました。当時は、相手の権利を考えず実践したという反省すべき経験があります。また、スーパービジョン（以下SV）については、他人事という印象を持っており、どこかしっくりこない自分の実践に戸惑っていたものの、SVを活用することはありませんでした。しかしその後、SVを受けたことによって実践を整理することができ、自らの考え方の癖に気づくことが出来ました。そして、相手の権利を意識し実践出来るようになりました。

このような経験を通じ私は、SVによってソーシャルワーカーの実践はどのように変化するのかを考えるようになり、現在はSVをテーマに研究に取り組んでおります。当事者の権利を意識しながら実践し続けることは容易ではないですが、ソーシャルワーカーとして高い専門性を身につけていくために、SVを実践に生かす方法を研究し続けたいと思っております。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

入会にあたってのご挨拶

安曇野市社会福祉協議会 山田 修

このたび、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました山田修と申します。よろしくお願いいたします。日頃は、長野県内にある安曇野市社会福祉協議会に勤務しております。これまで、住民主体の福祉活動を支援する部署での経験を経て、現在は地域包括支援センターの仕事に従事しております。地域包括支援センターの業務の一つとして、「支援困難事例を抱える介護支援専門員への支援」という重要な役割があります。私は、立場上、多くの介護支援専門員の方と話す機会があります。そのなかで、支援困難事例を担当する介護支援専門員の相談に向き合う、私たち地域包括支援センターの職員がどのような「思い」を抱いているのか、どういった支援機能や役割を果たしているのか、について関心を持ちました。昨年度から長野大学大学院の博士後期課程で研究をしています。

本学会員の皆様からのご指導によって、研究と実践の両面にわたる能力を向上させていきたいと考えております。ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

日本ソーシャルワーク学会入会にあたって

同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻 博士後期課程 菊池 留美

私は、医療機関、地域包括支援センターでの実践を経て、現在はソーシャルワーカー養成に携わりながら、母校の博士課程後期に入学して研究を行っています。「ソーシャルワークの価値と倫理の内在化」を研究テーマとし、文献、調査を通して探求していきたいと考えております。

今回、日本ソーシャルワーク学会に入会していただき、学ぶ合う機会を与えていただいたことに感謝しております。諸先生・先輩方のご指導を受けながら研究をおこない、いずれは少しでも貢献していくことができると考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

入会にあたってのご挨拶

社会医療法人北楡会 札幌北楡病院ソーシャルワーカー 高泉 一生

北海道札幌市の札幌北楡病院で医療ソーシャルワーカーをしている高泉一生と申します。高校卒業後、4年制福祉系大学に入学し、大学卒業後、約1年間の特別養護老人ホームでの介護業務を経て、急性期病院のソーシャルワーカーにシフトし、7年がたちました。その途中にソーシャルワークを研究したいと思い、大学院に進学し、修士課程を修めました。研究及び実践の関心としては、メゾ・マクロ領域のソーシャルワーク実践です。研究では、ソーシャルワーカーによる組織変革プロセスに焦点を当て、実践において組織変革にチャレンジしています。具体例を挙げると、透析患者の通院サポート体制強化や身寄りのない患者の組織対応の充実です。

最近、社会変革の根拠となるソーシャルワークの原理（人間の尊厳、人権、社会正義等）の深化が重要なテーマではないかと感じています。今回の入会を機に、皆様の研究や実践からさらに学びを深め、今後の自身の研究や実践に活かしていきたいと考えています。何卒宜しくお願い致します。

編 集 後 記

日本ソーシャルワーク学会通信（ニュースレター）133号をお届けします。

連日のウクライナ関連のニュースを見ながら、辛く、悲しく、心を痛める日々です。自分の無力さを感じながらも、しっかりと関心を持ちながら、日々の自分の仕事に誠実に取り組み、自分ができることに努めたいと思っています。

7月2日（土）・3日（日）には、青森県立保健大学の皆様のご尽力により、第39回大会が開催されます。オンラインではありますが、皆様と一緒できることを楽しみにしています。

暑い日が続きます。皆様どうかご自愛ください。

同志社大学 空閑 浩人
(学会副会長／総務委員会)

【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F（株） ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@zfhv.ftbb.net <http://www.jsssw.org>